

京極読書新聞 <第78号>

発行日 平成28年5月1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2016・第1回

今の中学生たちは、どんな本を読んでいるの
だろう？さあ、今年度の「京中生にインタビュー」
のはじまりです。まずは、新1年生
特集！ <編集部>

泉山 絢音さん(1年) 「いじめ -友だちという鎖-」
中川 桃花さん(1年) 「どんどんいけいけゆうき号！」



「いじめ -友だちという鎖-」
武内昌美／著 五十嵐かおる／原案・イラスト
(小学館, 2015)
「どんどんいけいけゆうき号！」
あんずゆき／文 (佼成出版社, 2009)

京極読書新聞は
毎月1日発行予定です



———中学校の新しい生活、どうですか？

泉山 部活動が楽しいです。私はバドミントン部に入りました。

中川 私も部活です。入った音楽部が楽しいです。

———そうですか。がんばってくださいね。ところで、泉山さんが読書感想文コンクールで優秀賞（6年生の部）をとった『いじめ』という本も舞台は中学校の部活動なんですね。

泉山 そうです。中学一年生になった梨沙とカンナがいっしょに入部したのがバレーボール部でした。カンナが一年生としては異例のレギュラーメンバーに選ばれたことがきっかけとなって、部の中でも教室でもカンナへのいじめが始まって行きます。

———この本は、いじめがどうして始まるかだけではなく、どうしたらいじめを終わらせることができるかまで書いてあるところがすごい。

泉山 人一倍努力をしてレギュラーになったのに、どうしてそれがいじめられる理由になるんだろう。人間の持つ嫉妬の心が二人の友情まで壊してしまいそうになる場面が恐ろしかったです。私はいじめをされたことが一度もないので、いじめられる人の気持ちを百パーセント理解することはできないかもしれないけれど、カンナと梨沙の友情が壊れる怖さを想像することはできます。この怖さを知ることが大事だと思いました。

———いじめを解決することになるバレーボール部の部長やキャプテンが梨沙の気持ちまでちゃんと汲みとっていたのが印象的でした。「妬まない人間なんて、いない。一人

も」という言葉は、ちょっと「おおっ！」となりましたね。まあ、こういうドラマチックな展開はなかなか現実にはありえないのかもしれませんが。私たちの現実の中では「ゆうき号」みたいなお話の方が圧倒的に多いと思う。

中川 私はノンフィクションの本をいろいろ読んだ事がありますが、その中でも、この本はすごく心に残った本です。

———写真がいいですね。ひとりひとりの表情が最高です。

中川 この本は、熊本県の米野岳（めのだけ）小学校で実際にあった話です。学校の裏手を流れる岩原川は子どもたちの最高の遊び場でした。でも、車イスの原侑希（はら・ゆうき）さんは川に降りられない。侑希さんも降りられるように、同級生や先生や校長先生が立ち上がるという話です。みんなで作ったペットボトルの船「ゆうき号」が川に浮かぶまでが描かれています。私が好きな写真は、運動会で二人の男子が「ゆうき号」に侑希さんを乗せた台車を後ろから押して三人で走った写真です。

———うん、走り終えた後の三人の表情がいいですね。ところで、この米野岳小学校がある熊本県山鹿市って、今、大地震で大変なことになっている熊本市の北側の町なんですよ。被害が大きかったのは熊本市の南側の地域なので直撃的なダメージは免れたみたいだけど、心配ですね。

中川 私はこの本を読んで、「みんなは一人のために。一人はみんなのために」という行動が大切なのだと思います。困っている人たちのためになることをしたいです。



村上 大我くん(1年) 「田中将大」 高橋 謙文くん(1年) 「サイクルヒット」



———中学校の新しい生活、どうですか？

村上 授業のスピードが速くて面白いです。

高橋 あと、給食もおいしい！

———科目ごとに先生が変わるといのは、小学校から来るととても新鮮に映るみたいですね。毎年のインタビューでこの感想が出てきます。あと、部活動の楽しさを言う新入生も多いかな。二人は当然野球部？

村上 いえ、ぼくたちはシニアに入ってます。

高橋 村上くんは余市のシニアで、ぼくは洞爺湖のシニアに入っています。

———シニア？

村上 ぼくたち、硬球でやりたいんでシニアを選びました。

———へえ！すると、1つのクラスの中に、野球部に入っている子とかシニアでやってる子とか、いろいろあるんだ。

高橋 そうです。シニアのチームにもいろいろな特徴があって、上下関係や躰に厳しいチームがあったり、選手たちに自主的にのびのび練習をやらせているチームがあったり、本当にいろいろです。

———兵庫県伊丹市生まれの田中選手が、どうして北海道の駒大苫小牧高校を選んだのかの理由もそこだったみたいですね。春の選抜に出た駒大苫小牧の選手たちののびのびした動きを見て「ここだ！」って一発で決めたい。

村上 そういう、自分の人生の分かれ道で見せる田中選手の選択がすごいと思います。自分が選んだことは絶対に放り出さない。「現状に満足することなく」「自分のやれることをやる」という強い気持ちをこの本から学びました。

———高橋くんの『サイクルヒット』も面白かったですよ。山田悠介の小説が面白いと思ったの、たぶん、これが初めてじゃないかな。

高橋 ぼくは野球の「サイクルヒット」に興味があって、そのものずばりのタイトルの本があったのでこれを選びました。それと、このお話には、交通事故にあって足が動かなくなった野球少年の「俊太」という子が出てきます。ぼくも三回骨折をして、その度に野球ができなくなって悔

しかったり集中力がなくなったりしました。あの時の気持ちを思いだして「俊太君」を見ているところもあります。

———そうですか。この本は、『第一話 サイクルヒット』に続いて『第二話 チョコレート』『第三話 ころう』『第四話 チョイス』と話が展開して、全体の題名が『ブラック』という本なのですが、高橋くん、第二話以降は読まなかった？

高橋 第二話の『チョコレート』が退屈で途中で読むのをやめてしまいました。

———うーん、それはちょっともったいない。この本は「転生」「生まれ変わり」の物語なんですよ。第一話の主人公「大村明」が生まれ変わって第二話の「リョウ」になる。「リョウ」が生まれ変わって第三話の「カラスのカンちゃん」になる。そうした生まれ変わりの果てに第四話の最終審判がくだされるという物語なんです。

村上・高橋 へえ。

———ここでね、大事件が起こってしまったんです。高橋くん、読書感想文の結びに「あきらめたらそこで終わり」と書いたでしょう。これ、第四話の最終審判なんですよ！ 第一話しか読んでいないのに、結論をすばり言い当てちゃった！ 長いこと読書感想文の審査員やってますけど、こんなこともあるのね…とたいへん驚きました。



■日本リトルシニア中学硬式野球協会北海道連盟ホームページより/リトルシニアとは

世界の青少年達にとって野球は盛んなスポーツであり、日本はアメリカについて二番目に野球の好きな子供の多い国です。

特にリトルリーグと高校野球は大変盛んで日本の青少年達の夢ですが、その中間にある中学生の硬式野球は終戦後復活していませんでしたので、リトルの卒業生の強い要望にも動かされて中学生を対象としたシニアリーグが結成され、春・秋は各連盟の大会、春には全国選抜大会、夏には日本選手権等を行うことを決めて発足しました。

さらに、全米選手権大会、日台対抗国際野球大会にも参加し、日本から世界にのびるリーグとされています。

「田中将大」

ベースボール・マガジン社/編集

(ベースボール・マガジン社, 2011)

「ブラック(サイクルヒット)」

山田悠介/著 (文芸社, 2011)



発行

京極町生涯学習センター湧学館

〒044-0101 京極町字京極158番地1

TEL 0136-42-2700(代表)

FAX 0136-42-2032

E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください

<http://lib-kyogoku.jp>

